
K

藤田迷路

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

K

【コード】

N3889C

【作者名】

藤田迷路

【あらすじ】

黒猫は一人の男と出会い、生きる意味を知る。BUMPのインディーズ時代の2ndアルバム『THE | LIVING | DEAD』
track6『K』を基に書いた歌詞小説です。

1・H（前書き）

妄想の類ですので見解に大差小差ありましようが、どうか寛大な目で読んでやってください。

急ぐ足。歩く足。立ち止まる足。様々な足が俺の視界の端に映る。今日はやけに足が多いが、俺の前にはどの足もない。道の向こう端まで見渡せそうだ。

この大通りを歩くとき、どいつもこいつも俺を見ては道を譲りやがる。

どうぞお通りくださいってか。そりゃ好都合だ。

俺はこれ見よがしに自慢の鍵尻尾を水平にしながら、並び立つ足の間を闊歩する。

「疫病神」

「悪魔の死者」

「化け猫」

俺の悪名は数え切れない。皆が俺を避け、忌み嫌う。

まあ、そうだろう。俺に近付きたがる奴なんて、余程の物好きか変わり者だ。

だが、俺にはそれが心地いい。それが俺の望んでいたそのものだから。

不意に石が飛んで来て俺の目の前で撥ねた。いつものように罵声と一緒に付いてくる。

またか……。やれやれご苦労なことだ。

もう慣れて普段の景色にしか見えなかった。

自分に関わろうとする全てが煩わしい。それなら無視してくれただろうがよっぽどいい。だから俺は嫌われてると知りながらも大通りを歩くのかもな。

一個の石をきっかけに石と罵声はその数を増していく。

俺は最低限の動きで石を躲すと、面倒くさいとばかりに闇に身体を溶かした。

自分が孤独だと自覚したことはない。そもそも俺にとってはこれ

が当たり前だ。

この街に流れ着いた頃、他の猫が興味を示して近付いて来たが程度の低さに嫌気がさし、いつものように独りを選んだ。俺にとっては自然な選択だ。

それ以来、街の猫はおろか、人さえも近付かなくなった。

俺はそれを楽しんですらいた。皆が自分から離れて行けば行く程、自分の縄張りが大きくなるような感覚がしていた。

月明かりを避け、公園の植え込みで俺は眠りに就いた。こうしてると誰にも見つからないもんだ。

冷えて来た夜風に身をさらに丸くしたとき、不意に地面が離れ身体が温かくなった。俺は自分の身に何が起きたかはわからずいた。

「こんばんわ。おチビさん。君はとても素敵な黒い毛をしているね」
首を回すと、すぐ傍に男の顔があった。絵の具で汚れた服にぼさぼさの頭と白いヒゲがうざったい。

俺は自分がその男の腕の中にいることに気付くと、すぐに男を睨んだ。牙を見せ威嚇した。

だが、男は気にも留めていない。それどころか平然と笑みさえ浮かべやがった。

「お前もそうなのか…。私たちはよく似ているみたいだな」

何を言っている？ お前と俺が似てる？ ふざけるな。

俺は男の腕の中で手足をばたつかせ、男の腕、顔、身体、届く範囲のもの全てを引つ掻いた。

男が痛みに腕を僅かに緩めた瞬間、男の胸を蹴って飛び退き、俺は再度威嚇した。

ざまあみる。さあ、憎め。忌み嫌え。

だが、男は静かな笑みを浮かべたまま、俺のほうに手を伸ばしている。頬の爪痕が赤い。

俺は思わず後ずさった。どんな猫の威嚇にも、野良犬や石やビンなどにも怖れたことはなかった俺が怖じ気づいている？

胸の中がむず痒くなってきた、俺は無様にも逃げ出した。
ウソだ。有り得ない。俺は疫病神だぞ。悪魔の死者だぞ。

電柱の陰、建物の隙間、車の下。俺は、まだ身体に残る温もりを
引き離すように闇に身を解かした。

だが、男はどこまでも追って来ては難無く捜し当て、俺の縄張りに
いとも簡単に入り果せた^{おひ}。

何なんだよ。こいつは！

逃げるのにも嫌気がさしたし、別に根負けしたわけじゃないが、俺はこいつの家に住み着いてやることにした。汚い家で隙間風もひどいが、これから来る季節を越すくらいの耐久性はありそうだ。俺は日がな薪ストーブの前に陣取り、あいつが呼んでも見向きもしなかった。

ホーリーナイト

それが俺の名前らしい。“黒き幸”なんて大それた名前だな。奴は少し離れたところで、時折こつちに目を向けながらキャンバスに木炭を走らせている。俺は奴を横目で一瞥すると、わざと尻尾を左右に揺らしてやったりした。何してんだか。

俺は興味がなさすぎて欠伸あくびが出た。

ある日、あいつが完成した絵を見せた。そこには艶やかな黒で描かれた俺がいた。

なんだ俺を描いているのか。…ま、三食飯付きだ。俺に迷惑かけなきゃそれくらい許してやるか。

「お前と私はすっかり友達だな」

冬の終わりに奴からそんな言葉を聞いた。

数ある悪名の響きには何も感じなかったが、この“友達”とう響きには何か違うものを感じる。

友達…か。なるほど。そんなに悪くないもんだな。

次第に俺も奴を意識し始めた。と言うよりは構ってやるといったほうがいいな。

寝てる足を引つ搔いたり、出掛けてる間に部屋をめちやくちやにしたり、布団の中に潜ったり。

春になると行動を共にすることも多くなった。

奴が街角で絵を売ると言えばついて行き、傍らで丸くなった。

奴が食事すると言えば隣で食べ、奴の皿をめちやくちやにした。

奴が寝ると言えば毛布を引つ張って、俺だけの物にしてやった。

そのどれもがとても俺には楽しくて仕方なかった。

庭の木が枯れ葉になる頃。いつものように部屋で奴のモデルをしてやっていると、ばたんと音を立てて奴が椅子から崩れ落ちた。

何だ？

俺は訝いぶかりながら近づくと、奴の呼吸が弱々しくも荒い。

直感した。これは死期だ。

死体なんていくつも見たし、自分の死すら怖いと思ったことはない。だが今、目の前に迫った恐怖に足がすくんでいる。

おい…、ウソだろ。

俺は奴の顔をひとつ舐めると、奴は掠かすれた声で「心配いらぬよ」と微笑むと、胸を安堵が駆け抜けた。

奴は覚束ない足で立ち上ると、徐おもむろに震える手で手紙を書き始めた。書いては休み、書いては休み、男はやつのことで一枚の手紙を書き上げて俺に差し出す。

「なあ、お前に頼みがあるんだ。これを届けて欲しいんだ」

奴がした、初めての頼み事だった。

それから奴は独り言のようにゆっくりと話し始めた。

「昔の私は常に誰かと距離を取り、壁を作って人を拒絶していた。そんな私の黒だけで描かれているような絵を彼女は好きと言ってくれてね。以来、絵は私の夢になったんだ。小さい町だか賞ももらってね。皮肉にもそれは大切な人と故郷に別れを告げることになってしまったがね。今、彼女はどうしているだろうか…。良い人と出会い、良い人生を送っていてくれると祈りたい」

K

奴の呼吸は浅く、喉にはたくさんの皺を作っていた。

こんなに痩せていたっけ…。

「彼女はこの手紙を迷惑に感じるだろうか。願わくば受け取って欲しい。待っていて欲しい。…なあ、ホーリーナイト。これを彼女に届けてくれ…お願いだ」

やがて奴は早い夜を迎えたように、静かに横になった。
俺はいつもの習慣で毛布をかけてやった。

いつまでも起きない奴に俺はどうしていいかわからず、焦点も曖昧なまま辺りを見回すと、いつの間にか奴の部屋には画材道具と簡単な家具しかなかった。黒い絵の具の空チューブだけがあちらこちらに転がっている。

薄っすらと明るい窓の傍には、恐らく奴の故郷の風景か。丘に佇むたす女の子を描いた絵が何枚か飾られていた。青いスカートが目を引く。

俺は記憶するでも忘れるでもなく、奴がいつも大事そうにしていたスケッチブックをめくった。俺がいた。一枚を除いて全てに俺がいた。

つたく、悪魔の使者と呼ばれた俺の絵ばかり描くから、全然売れないんだよ。

実際、俺は奴の絵が売れているところを見た事がなかった。

瞬間、俺の身体の芯を何かが駆け抜け、心臓に突き当たった。

ま…まさか…。

俺の奴との記憶の点が紡がれ出し、今ひとつの線となって奴の死に結びついた。

俺の絵だから売れなかった…

俺がいたから皆が寄り付かなかった…

俺が奴の食事の邪魔をした…

俺が来たから奴は二人分の食事を…

俺さえいなければ奴は死なずに済んだんだ…

俺が…俺が奴を殺したんだ…

自己嫌悪は涙となって溢れ出した。

俺は奴の身体に寄り添ってみたが、いつも布団に招き入れる大きな腕は俺の身体を包まなかった。

謝りたい。届かなくてもいいから謝りたい。

声を挙げて奴を呼んだ。名前なんて知らなかったが声の限り奴を呼んだ。

何度も触れて、何度も舐めて、何度も引つ掻いて、何度も噛んだ。でも奴に温もりは戻らなかった。大好きな微笑みも、ついで俺に向けられることはなかった。

俺は自分を責めた。自分の感情を御し切れずに閑散とした部屋を暴れ回ったが、疲れが余計に嫌悪感を重くした。

初めて手にした温もりは静かに、それもいとも簡単に滑り落ちた。悪魔の使者と呼ばれた俺が温もりを欲した報いがこれかよ。俺はただ初めての友達といえるのが嬉しくて…。

もう、いいや…。疲れたよ…。もう何も失いたくはない。

あと何回眠れば奴に会えるだろうか。そう思いながら、俺は奴の傍で眠ることにした。

再び奴の身体に近付き、今もうつすらと残る頬の傷跡をそつと舐める。

あのときはすまなかった。

俺は怖かった。温もりに触れたいと望みながら、その温もりを失うことを。だから近付く者を傷つけることで自分を守っていたんだ。

それをお前は「似た者同士」と言っただけで名前を呼んでくれた。こんな気持ちにさせてくれたのはお前だったからだ。

恩返しどころか、恩を仇で返してしまうなんて。本当にすまなかった。

俺は奴の傷を癒そうと、もう一度奴の頬を舐めようとして舌を止めた。

……待て。そうだ…。まだまだ！

俺の中の何かが沸き立つ。

奴が俺にした唯一の頼み事。俺にはやらなきゃならないことがある。

あの大通りのように目の前が開けるのを感じると俺は立ち上がり、

奴の最期の手紙をしつかりと啜^{くわ}えた。

わかった。お前の願いは確かに受け取った。任せてくれ。必ず守るから。

窓を見ると外は既に暗くなり、雪が木を叩いていた。これから外に出ようなんてやつはいないだろう。

だが、一刻も早くこの手紙を届ける。俺はこれを届けなきゃならないんだ。

俺は奴の身体に、俺のためにと奴がくれた毛布をかけると、静かにドアを出た。

空にはこれから来るであろう深い闇と強い寒さが渦巻いているのが見えた。

俺に孤独をもたらしてくる存在だった夜は、今は俺の命さえ奪おうとしている。闇が足に絡まり、思うように走れない。

それでもこの約束は何があっても放しはしない。俺は二度と滑り落ちることのないように手紙を持った口にさらに力を込め、走った。

山では雪が足の感覚を奪い、谷では寒風が毛を凍りつかせ、眠気が視界を遮ろうとする。

過ぎる街では石と罵声が雪よりも激しく降りつけ、もつれ倒れる俺の左目と後ろ足に石が当る。

俺が石に当たるなんて、ついに焼きが回ったなあ。

そう自嘲したところで罵声も雪も止みはしない。肩、背中、頭、腹。次々に石が感覚の薄れた身体を傷付け、僅かな痛みと滲む血が冷えた身体を少しだけ温めた。

「悪魔の使者だ！」

「疫病神め！」

「魔女の使い魔め！」

違う。俺はホーリーナイトだ。

名前なんて呼ばれたことはなかった俺に奴がくれた大切な名前。どれだけ汚く罵ろうと、俺には奴がくれたこの名前が胸に刻まれている。

忌み嫌われ、蔑まれた俺にお前は安らぎをくれた。温もりをくれた。名前を呼んで、俺の存在がそこにあることを教えてくれた。生まれて来た理由、生きる意味なんてわからない。

だが、ひとつだけ確かなことは、俺は今ここでこの日のため生き

ているという真実。

お前と出会え、俺は生きていく意味と出会えた。俺はお前のために生きると思ったんだ。

どこまでだって走ってやる。足が千切れようとも、この目が視力をなくそうとも、俺は命に替えてもこの手紙を届けるんだ。

それが今の俺の生きる意味だから。

痛み、寒さ、疲れ、眠気はひとつの重荷となって俺の足にのしかかり、今にでも崩れ落ちそうだが、足を止めれば全てが終わる気がして、俺はがむしやらに駆け抜けた。

二つの山と一つの谷と二つの街を抜けると、鋭い空気を暖める朝日が丘の向こうから顔を出した。奴の部屋で見た女の子が佇んでいたあの丘。俺は奴の故郷に辿り着いたんだ。

既に足の感覚は完全になくなり、ただ俺を支えている物にしか感じられずに、もつれた感覚もないまま何度も転んだ。

左目も視界のほとんどを失い、右目も霞み出した。意識も何度飛んだかわからない。身体中の傷から出た赤い血は凍りつき、奴が素敵と言ってくれた自慢の黒い毛を疎らに逆立てている。俺のその姿は“悪魔の使者”の異名に拍車をかけ、罵声と石が前に立ち塞がり行く手を阻む。

「悪魔の使者よ！」

「帰れ！ この化け猫が！」

「何しに来やがった！ 死に神が！」

ここでも散々な言われようだな。だが、俺はホーリーナイト。

この手紙を届ける聖なる使者だ。

俺は名前がこんなにも力と勇気を与えるものとは思ってもいなかった。名前は自分が自分である証なんだ。自分の存在を証明する唯一無二の記号。

俺は奴と出会うまで名前がなかったことを後悔した。呼ばれるだけで心に触れられたように温かくなり優しさが滲み出す、今では俺の大切な物になったこの名前を誰にも汚させはしない。

動かない足が何だ。走れなくなっても、この歩みだけは誰にも止

K

めさせない。

俺は石と罵声を投げる奴らに、とくと見やがれと言わんばかりに、鍵尻尾を水平に威風堂々と歩いてやった。

温まり出した雪を転がるように目的の家を捜していると、村の通り向こうに赤い屋根の家が僅かに残る視力に強烈に飛び込んで来た。確信などなかったが、俺は惹き付けられるように力の入らない足を引きずりながらも駆け出した。泥だらけになりながらも歩み寄ると、宛名と標札が一致した。

見つけた。この家だ。

俺は勇んでドアを叩こうとするが、まるで力が入らない。引っこすにも爪なんかとうに失っていた。

ああ…、ここまで来てダメなのか。

俺はもう動けなかった。絶望が砕けかける身体をさらに押し潰す。もはや全身がただの器のように自分の神経を離れていき、意識が飛んでいこうとするのが自分でもわかる。きつともう戻って来ないことも。

消えかける意識の中、不意にドアが開いたのが見えた。何故開いたかはわからなかったが、ドアの前に立つ老婆に奴の部屋で見た女の子の面影が朧げに見て取れた。

間違いない。この人だ。

老婆は虚空を見つめて、辺りを窺っている。

「…そんなわけないわね。やっぱり気のせいね」

待て、待ってくれ。

俺は懸命に首を伸ばし手紙を差し出すが、身体が動かさず気付いてもらえない。俺は手放すまいと誓った手紙を一度だけ手放すと、渾身の力で鳴いた。

K

「あら？ まあまあ、おチビちゃん。こんなに汚れて一体どうした

のかしら」

老婆は俺の抱き上げた。老婆の腕は、奴のものとは似ても似つかないほど華奢だったが、奴と同じくらい温かかひのが感覚のない身体にもわかつた。

それ以降の記憶はない。

小さな部屋でさっきの老婆が汚い猫の身体をお湯で洗い終わると、キレイな黒い毛が現れるのを俺は傍らで見ている。

ああ…、あれは俺か。そうか…、俺は死んだのか。

気付くと身体が浮くように軽かった。

ふと人の気配がして横を見上げると、奴がいた。驚きや嬉しさよりも、今までいなかったことが不自然だという感覚で安心した。

老婆も気配に気付いたのか視線を向けたが、老婆には見えてはいないだろう。でも、「やつぱり…」と言うと老婆も涙と微笑みでそれに応えた。

奴は微笑みを保ったまま、俺に向き直る。俺の大好きなあの微笑みだ。

「行こうか、ホーリーナイト」

もう、いいのか？

「ああ、お前のお蔭でもう一度彼女に会うことが出来たんだ。礼を言わねばな」

お礼なんて…。俺は…俺はアンタを…

「そんなことはいいんだよ」

でも…、俺がアンタにもらったものに比べたら、まだ何も返せてない。

K

「そうか…。じゃあ、また一緒に歩いてくれるかい？」

…そんなことでいいのか？ もっと…

「それがいいんだ。私がそうして欲しいんだ」

わかった……。アンタと俺は似たもの同士だからな。俺がいなきや何も出来ないんだな。

「そうだな」

なあ。

「何だい？」

……………ありがとう。

「こちらこそ」

その声が温かかった。俺はまた奴の前を歩いている。少し遅い歩調に合わせながら、鍵尻尾を水平に。

手紙に添えられた絵には、タンポポの咲き誇る丘で俺とじゃれる一人の少女の姿が描かれていた。

タイトルは『HOLY NIGHT』。

笑顔を浮かべた老婆はタイトルにアルファベットひとつ付け加えると、俺を“ホーリーナイト聖なる騎士”と呼んでくれた。

K

<了>

10・T (後書き)

ご精読ありがとうございます。

いやはや、話が長くなりすぎて猛省です。

もっと簡潔に端的な言葉で表現する術を身につけなきゃと思います。

因みにタイトルの意味が分からない人は、サブタイトルの空いてるところにメインタイトルを当て嵌めてみてください。からくりはそこに隠されていますから。

人によって曲の捉え方は様々あります。

ですが、この小説がアナタの描く『K』と同じであれば嬉しいなあ。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3889c/>

K

2009年3月24日10時14分発行

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。